

十字架のイエス・ベネディクト修道会

修道院便り

2011 年・クリスマスー 2012 年・新年



フランス本部修道院



主の御降誕と新年の

お喜びを申し上げます。



2011 年も主のご降誕を迎え、そして新しい年を迎えようとしています。大震災という悲しみに沈んだ年でしたが、この出来事を通して私たち一人一人に何が語られているのか考え祈った年でした。

その中で、今年は共同体にとって、Sr. 佐々木あとの初誓願宣立と Sr. 荻野恭子の誓願五十周年、Sr. 船田由美の誓願二十五周年を祝う喜びもありました。神が修道生活の道に呼んでくださったことを感謝し、この招きに忠実に応えたいと一同決意を新たにいたしました。

また、今年は本部修道院で行われた会議を通して、本会の霊性を一層深く確認し、深めることができました。地震のために危ぶまれた増築工事も順調に進み 11 月末には完成でき、車イスの姉妹の生活が向上できたことも大きな感謝です。

来る年も皆様の上に神の祝福が豊かにありますように。
希望のうちに心からの感謝を込めて

十字架のイエス・ベネディクト修道会
平和の元后修道院 姉妹一同

あの日以来のこと



Sr.Veronica 高橋 和子

このお便りを読んでもくださる皆さんはどんなお気持ちで新年を迎えられるのでしょうか。

2011年3月11日の東日本大震災は日本中の人ばかりではなく、世界中の人々に様々な思い、間を抱かせたことでしょう。

私は岩手の釜石市に住んでいて、釜石のカトリック教会で洗礼を受け、そこから今の修道会へ、皆に見送られて出発しました。40年以上も過ぎた今でもその一員であるかのように助けや励ましを受けております。ですから、ニュースで津波の被害の様子を知ったとき、また、その被災地に日本中から、外国から多くの人々が即座に援助に駆けつける様子を見ながら、私は居ても立ってもいられませんでした。物質的にも体力的にも無力な私には何一つ役に立てず、途方に暮れ、ただ、神のみ前に座り、手を合わせるのみでした。

「すべての人の父である神よ、このような状況において、無力な私のなすべきことはなんでしょうか。また、私にできることはなんでしょうか。」

このとき、分からせていただいたことは、今いる場で、つまりこの修道院において任されている修道者としての使命を忠実に生き続けること以外にないということでした。それで、他のあらゆる人々の社会における使命に一致しつつ、私は再出発しました！この時以来、心に響いている私たちの会則のいくつかの言葉をここに記してみたいと思います。

「すべての人への神の愛、貧しい人々に示される特別の慈しみへの信仰から、本会は誕生した。」

「神は私たちをキリストにおいてお選びになりました。・・・それは神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、私たちがたたえるためです。」(エフェソ1, 4-6)

「十字架の神秘によって照らされ生かされている私たちはきょうだいの苦

しみや、時には人々の絶望的な闘いを、自分自身の弱さのうちに負い、この生活から生じる平和と喜びを通して、勝利の十字架がいつも唯一の希望であることを証しする。」

「社会と私たちとの断絶は現実であるにもかかわらず、社会との深い交わりの中にとどまっている。万事から離れて万人と一致している行者のように、私たちは現代の人々の探求、希望、苦悩に対して、心も精神も開いている。そして、キリストのいけにえと一致することによって、実を結ぶために地に落ちて死ぬ一粒の麦として、人々の活動に協力する。」

「私たちは各修道院所在地の教会と一致して、地域社会への仲間入りと、そこでの私たちの使命達成の在りかたを検討する。単純で真実なつき合いによって、その環境で友好関係をつくることができる。いつも私たちの生活様式をわきまえたうえで、人々の実際的ニーズに心を配る。」

「人生行路でキリストが出会わせてくださるすべての人に十字架からくる光と復活された御方の喜びを伝えたい。しかし、愛は可視的なものの限界を超える。イエスの命を使い尽くさせた熱心は私たちの心にも燃えている。それは、『キリストの顔にある神の栄光の知識』がすべての人の上に照り輝くためである。」

大震災やその他の災害に遭われた皆さん、また、様々な形で支援に励んでいる皆さん、この九十九里浜の海辺の小さな町で私も皆さんと心をつにしめて十字架上のイエスのもとに、じっとたたずまれた聖母マリアとともに、深い信頼と希望をもって祈り続けております。

人智を超えた大自然の出来事をとうして「私があなたがたを愛したように、あなたたちも互いに愛し合いなさい。」とイエス様が言われたように、どの人もお互いにいたわり合い、助け合い希望に満ちた社会が築かれますように！



3月11日のこと



Sr 赤井ゆき子

日本の国にとって、歴史的な出来事の日。

大地震と津波のニュースは、電波に乗って全世界に知らされました。私たちの修道院は太平洋の海の近くにあるので、フランスの共同体の姉妹たちは、日本の共同体の姉妹たちは、無事なのだろうか？みんな死んでしまったのでは？と、とても心配して下さいました。

国内外から、友人、知人、家族の方々から、沢山のお見舞いをいただきありがとうございました。

白子町は、大津波警報の予報があったのですが無事でした。ちょうどこの日、ベネディクト会の修道士、高橋さんが黙想に来られた日で、彼のふるさと宮城県女川町は、大きな被害を受け、彼の家族親戚合わせて9名も亡くなられました。今回の大地震は、あまりにも大きな被害で言葉を失うほどのことでした。日本人すべての人の心に、深くさまざまな思いを残されたことでしょう。「何をしたらいいのか」「何ができるのか」。

私たちは毎日、亡くなられた方々の冥福と、被災者への助けを祈り続けるばかりでした。余震はつづき、これから東海地方や東京、そして、房総沖の大地震も予測されていて油断できません。

10月30日は白子町で、避難訓練が行われました。白子町は高台がない平地なので、民宿のホテルが避難ビルとして開放されました。

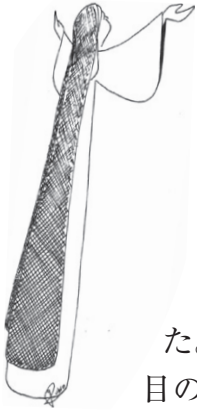
地震や台風の災害ばかりでなく、交通事故や病気になることだって、いつこの身にふりかかるかわかりません。いつも心の準備が必要であることは言うまでもありません。「目覚めて用意していなさい」という主のみことばが、心に浮かんできます。

3月11日から、国内外から多くの救援と支援は、大きな励ましと力になり、そして今も様々な形で、被災地の復興に力をつくしている人々に、感謝し応援しています。

被災者に暖かき冬念じつつ。

初誓願

Sr.Maria・Gratia 佐々木あとも



小学校6年生の時、いどこから見せてもらった「アラベスク」というバレエまんがが大変気に入って、自分でもその単行本を買い求め、何度となく読み返した時期があった。

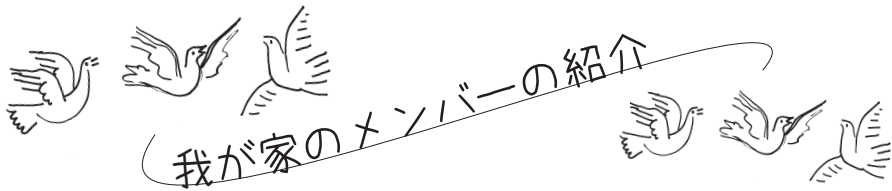
時は移り、2008年5月私はここ白子の修道院へやって来た。シスターたちと生活を始め、志願期を経て修練期2年目の後半に入り、「アラベスク」のストーリーの一場面が思い出された。

バレエ公演の主演に抜擢された主人公ノンナ・ペトロワに、師ユーリ・ミロノフが言う。「君は今、バレエという道の扉を開いたところだ。永遠に続く苦しさの道なのだが、どこまで歩いて行くかは君次第だ。」ノンナは大きな両開きの扉をあけ放っている。そのむこうには断崖絶壁の峡谷が延々と続いている。彼女は「どこまで・・・」とつぶやきながら遠くを見つめる。

当時20代半ばであったまんがの著者山岸涼子が、どれほど「道」というものを意識してこのことばを登場人物に言わせたかは定かでない。しかしこの師のことばは、永遠へのあこがれをしめすポーズ＝アラベスクを美しく舞うノンナの姿とともに私の心に残っていた。

永遠の神、今生きておられる神は「白子へ来なさい」と私に呼びかけた。十字架のイエス・ベネディクト修道会と出会って18年、主イエスの導きと皆の祈りにささえられ2011年11月1日、神と諸聖人のまえで初誓願。今、私は修道生活の扉を開く、永遠のよろこびであるイエスにむかって。





Sr 本田由利子

お断り；これは私が見たり、感じたりした事で、本人や他の人達は、かならずしも同感でないかもしれません。

Sr フランシスカ

私たちの院長です。一人ひとりの姉妹たちの事に、良く心を配り適切な助言を与えられる、太陽のように明るい人です。
時間の使い方が実に上手で、多くの仕事をこなします。院長職の上に修練長、車の運転手で姉妹たちを必要なところに連れて行き、お買い物もし、お手洗いの掃除、時たま台所、畑等々とやる事が沢山あります。
すぐカツ！となるが、後味悪さを残さず、サッパリして真夏の5分間の夕立のよう、あとに虹が見える、と云うような人です。

Sr ヴェロニカ

質実剛健、石橋をたたいて渡る人、何でも出来ます。アシスタントでありエコノマ（管理係）であり、多くの大役を果たしていながら、小さな体で何でも来いとかまえている人。だから困ったこと、知りたい事は全部彼女に尋ねます。

Sr マリ・レティチア

私達の共同体で、一番の年長者です。とても明るい（根明）人で、良く人の必要に気付き親切です。しかも、80歳過ぎていると思えぬ程、身軽で走りながら舞いながら歩いていると云う感じです。彼女は、オルガンやシタールを奏でます。

Sr 美智子

とても明るく常にニコニコして（ご機嫌の悪くない時）、気軽に話したり何かお願いしたくなる人です。彼女は看護係りですが、出来る限り薬を使用せず、自然の方法で良くして上げようと心を配り、又実に良く知っています。ほんのちょっと食いしん坊です。彼女は歌い、三角バイオリンを弾きます。

Sr マリ・アルベリック

顧問として目上を助ける人、大変静かで落ち着いていて、親切沈着それでいて少々おっちょこちょいのところが、魅力的な人です。
植木の世話をよくします。以前は、お琴をかなでていました。

Sr ゆきこ

とても愛らしい明るい親切な人で、何でも「ウン、イイヨ！イイヨ！」と

言ってくれます。仕事は手早く、お花を育てるのが大好きです。絵を画く事も上手で、様々なアイデアを持ち、皆から愛されます。芸術家タイプです。

Sr 玉枝

よく働き、よく食べ、よく話します。とても明るく笑顔が美しい人です。目が不自由ですが、彼女は白杖をあまり使いません。手に持ってもあまり使用せず、何処かに置き忘れてしまったり・・・。とにかく働く時は無我夢中なので、そばを通る時は、こちらが気をつけねばなりません。彼女はギターを弾きます。

Sr さちこ

寡黙で謙虚で大変親切で、沈着に事をはこびます。食堂係で、美味しいパンを作り、お料理も上手、聖務のオルガン伴奏者でシタールも弾き、多芸な人です。見かけによらず喜劇役者でウクレレを弾きながら自作の“白子音頭”を歌い、私達を笑わせます。今年は、サツマ芋を作り、始めてやった事なのに、沢山の収穫がありました。

Sr 由美

常にニコニコしていて、つい気楽に話しかけたくなる、そして何でもお願いすればやってくれる優しい人です。宗教法人をはじめ、銀行の事など全部引き受け、彼女が事務所に居る時は、ちょっと尋ね事をして、いつも親切によく教えてくれます。大変几帳面な人です。少々食いしん坊で嬉しそうな顔で食べています。でも先ず人を優先します。しかし、彼女が怒ったら怖いのです。しかしそれは真実、万に一回しかおこりません。

Sr 喜代

小柄で実によく働き、多くの仕事をこなしています。お台所一切を取り仕切り、お客様の接待係でもあります。愛想は無いが誠実な人柄がにじみ出ている人です。昔、スール・シュザンヌ（フランス人の年取った姉妹）から、刺繍やストラの作り方を習い、今でも注文があると、自分の自由になる時間で、コツコツと作っています。

Sr マリア・グラティア

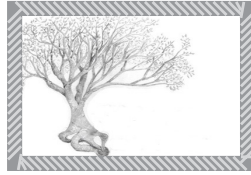
大変明るく、歌って踊って人を楽しませようと云うような人です。とても身のこなしが優雅な人です。白杖を左右に振りながら、一人で電車やバスを乗り継いで、どこにでも出かけられます。リコーダーが上手です。

千鶴子さん

此処のベンヤミンです。マッサージをするのが大好きで、誠実な謙虚な人です。お料理が大好きです。色白でポッチャリしているので、私は“太福”とあだ名をつけました。笑いだすとなかなか止まりません。音楽特に歌う事や踊る事が大好きです。マンドリンを奏します。



短い祈り



Sr.M.Alberic 樋口碩子

久々にフランス本部に滞在して、色づき始めたマロニエの木陰を散歩しながら、終生誓願前の一カ月、ここで毎日黙想したことを思い出した。黄色い落ち葉を敷きつめた木の根元に、フード付きの大きなマントで身を包んで座り込み、ヨハネ・カシアヌスが記した、砂漠の師父たちの“講話”をゆっくりと読む。師父イサク（第10講話）の語ることに、特に心を傾けた。神との深い一致に至るためには、絶えず神を想うことが大切。そのための一つの手段として、詩編の一節を謙遜に神の助けを求めながら唱えること。

“神よ、速やかにわたしを救い出し、主よ、わたしを助けてください。”

（詩編 70,2）

この短い祈りを、苦しい時、誘惑を感じる時はもちろん、助けを求めるために、また心が喜びにあふれている時は、思い上がることのないようにと助けを願う。また、すべての行為において、休む時、夜目覚めた時、起きる時、出かける時帰った時など、いつでも繰り返す。

これが続けていると、他の詩編も深く味わえるようになるばかりか、すべての詩編が自分自身のもの、自分が作ったように感じられる程になり、心から唱えることができる。

そこで私も、さほど頻繁にはではないが繰り返してみた。もちろん“教会の祈り”は、1日の最初のもの以外、すべての時課はこの祈りで始められる。夜休む時は落ち着いてくり返すことができ、心は安らかになった。詩編を深く味わう喜びに浸されたこともある。

1973年、はじめて帰国した時、A・ローテル師から頂いた“無名の順礼者”の本があったので“修徳の実践”仏語版“プチト・フィロカリ”と合わせ読んで実行してみた。多くの形容詞をつけて長くしたものよりも、単純な形式の方が唱えやすいので、フランス語の2人称単数形で、親しみを込めると同時に、リズム感のあるものにしてみた。

セニヨール ジェズ クリ エ ピチエド モワ

Seigneur Jésus Christ, aie pitié de moi. (主イエス・キリスト、我をあわれみたまえ。)

ちょうど4拍を2回で終える。呼吸1回に脈4回のリズムで続けられ調子が良かった。しかし、暑い夏となり、午後など聖堂で祈っていると、心も体も静まるのはよいけれども眠気をもよおし、体のリズムに合わせて、いつの間にかコックリ・コックリ・・・これはいけない。こんな単調な祈りは止めようと、匙を投げてしまった。

数ヵ月後、日常を離れて2日間の黙想会に参加した。夜のしじま、深い想いに沈んでいる時、ふと気づくと胸の鼓動が、あの4拍子の祈りを続けているではないか。全く驚いてしまった。

体のほうはちゃんと覚えていたのである。その後は、やろう止めようなどと思わずまかせておいた。数年後アメリカの修道院へ移ることになり、本としては聖書と“無名の順礼者”だけを荷物に入れた。この祈りを学ぶ機会は訪れなかったが、アイルランド人ベネディクト会士、ジョン・メイン師が帰天されて間もなく、雑誌などで彼の手記を読むことがあった。師は、入会以前インドの大使館員であられた頃、マントラ（7音節以内の短い祈り。）を習うために、導師の所へ行ったそうであるが、「あなたはクリスチャンだから、自分のマントラを見つけて来なさい。」といわれ、聖書の中から「マラナタ」（1コリント16・22－主よ、来てくださーいという意味のアラム語）を選ばれた。ベネディクト会士となってから、修道院へ祈りを学びに来る人々に教えたとのことであったが、ワシントンの聖アンセルム大学の学長であった時、レクテオ・ディヴィナ（聖書や教父たちの著作の深読）としてヨハネ・カシアヌスのものを読み返し、「ああ、わたしたちには昔（4世紀）から、このマントラがあったのだ」と気づかれたそうである。

マントラとしては少々長いけれども、日本語の「教会の祈り」では、「神よ私を力づけ、急いで助けに来てください。」と4拍子で、リズムカルに唱えることができる。それで、ごく自然にわたしの祈りとなった。

言語は、生活に即して出てくるもののようで、日本にいてもアメリカの友人のことを考えれば、心は英語で語りかけている。アメリカでの黙想中、聖母マリアに英語で問いかけている自分に気づいて驚いた体験もあるので、心の祈りは体にまかせている。

Seigneur Jésus Christ , aie pitié de moi . (主イエス・キリスト、我をあわれみたまえ)

神よ わたしを 力づけ 急いで 助けに 来てください。



“善きサマリア人” との出会い



Sr.Francisca 岡島静代

9月に私はフランス本部に会議のために一か月滞在しました。日本へ帰る前の日曜日のことでした。タンザニア人の若いシスターと一緒に、入院しているシスターをお見舞いにパリまで出かけました。帰りに近くだからとシャン・ゼリゼに行ってそれからモンマルトル大寺院にメトロで行くことになりました。

モンマルトルのこの教会は私たちの修道会の発祥の地なので、お参りしたかったのです。ところがメトロから地上に出るのに気の遠くなるほどのらせん階段を昇らなければなりません。もうすでに脚が相当疲れていた私は途中で上がれなくなりました。でもあと少しというので、やっと地上に出ました。でもそれが初めだったのです。そこから坂をずっと上がって行きましたら、又目の前に長い高い石段があったのです。私はそこで、もうあきらめかけたのですが、もう一人のシスターは脚もいいし元気だし、ここで引き返すのは残念そうだったので、なんとか昇りはじめました。

ところが、途中私は急に胸が苦しくなり、すごく具合が悪くなってしまいました。今までに経験のない苦しさでした。どうしたのだろうと倒れないように、手摺りにしっかりつかまっていました。日曜日だったので、観光客が大勢いました。すると、ひと組の夫婦が近寄って来て、どうしましたか？と。私は何も言えずにいたら、「すぐにしゃがんだほうがいい」と私を石段に座らせてくれました。でも石段はあまり広くなく大勢の人々が通るのに邪魔になり、大抵の人たちが迷惑そうに見て通り過ぎて行きました。

奥さんのほうが、砂糖を口に入れて水を飲んだ方がいいと言ってくれましたが、砂糖はもっていませんでした。すると、その方はどこかへ探しに行つて砂糖を手に入れてきてくれました。それを口に入れて水を飲み、しばらくすると胸の痛みも和らぎ気分も良くなったので、もう大丈夫です、と言って別れようとしたのですが、少し休んだ方がいいと言われ、路上の端に座っていました。もう、モンマルトルに行くのはあきらめて帰ろうとしたら、そのご夫婦はメトロまで、一緒に行ってあげると言うのです。両脇から私を支

えて歩いてくれました。人混みのために私たちだけだったらなかなか前に進めなかったでしょう。3人の子供たちもいやな顔一つせずニコニコついてきてくれました。メトロのホームを歩いていたら、今度は私の脚がひきつって、ものすごい痛みがきたのですが、少し休んだら治りました。私は恥ずかしさと惨めな気持ちになっていましたがそのご夫婦はそれで、ますます私のことを心配してくれて、東駅まで一緒にいってあげましょう、と言って下さったのですが、私は申し訳なくて、大丈夫ですと言ったのですが、やっぱり、一緒についてきてくれました。道々お礼を言うと「当たり前のことですよ」と何度もおっしゃいました。その上、私たちがお金を一銭も持っていないと知ると（修道院を出るときに、お財布を忘れて来てしまったので）何かがあったら困るでしょう、と20ユーロ札もくださったのです。東駅でお別れしてから、涙が止まりませんでした。言葉もありませんでした。

イエスが語られたたとえ話の善きサマリア人に本当に出会ったのです。本当に素晴らしい家族でした。優しい家族でした。もし、東京で、外国人が具合が悪そうにしているのに出会ったら、私は一体同じようにできたでしょうか！

その日の夜、奥さんは私たちが無事に着いたかどうか電話もかけてくださったのです！

イエスはあるたとえ話をなされた。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」

律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」 ルカ 10：30～37



「 希望 」



Sr 服部美智子

“疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。

休ませてあげよう “(Mt 11 - 28)

今年3月11日の大震災で愛する家族を亡くされたかた、今だに家族の行方が分からない方、そして、仮設住宅その他でご不自由をしのばれている方々のことを思うと、心が引き裂かれるような心情です。

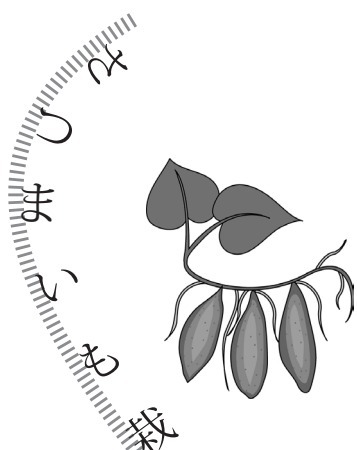
私たちひとり一人例外なく、一生は一度の大切な生命を頂いています。それは、ひとり一人が幸せになるためです。その希望を持って周囲を見てみると、希望の光があちこちに灯っていることに気がつきます。

この震災で世界から、百数十カ国の人々が、日本に援助の手を差し伸べてくださったことを思う時、他の人の事を考える深い人間愛と信頼は、神の似姿として造られた人間の真の姿だと思えます。そして、ひとり一人の中にある優しさ、それこそ人間が人間であることの証ではないでしょうか。

数年前、マスコミの医療バッシングと、患者の権利意識の肥大化で医療が崩壊しかけた時は、私たちの住む千葉県でも、県立病院が医師不足で、多くの人が困ったことがありました。最近ある雑誌で見たのですが、一人の日本人医師が、アメリカでの恵まれた地位を捨てて帰国し、母校の発展や後輩の育成に貢献しつつ、医療を再構築するため、また可能な限り、患者に負担をかけない医療を実現したいと、質の高い医療を心がけて、日々頑張っておられます。

また、一人の方は、レベル4の進行性中咽頭がんで、余命2年と云われ一時は生きる気力も失い、家族へ遺書も書いたのですが、苦悶を一人で抱えることを止めて、つらかった闘病体験を書き残すことを始めたら、心が浄化されて、現在は元気に精力的に、活躍されています。

私は、一度しかない人生を有意義に生きたいと思います。



Sr
大
場
幸
子

昨年の5月、さつまいもの苗を植えるために、3坪程、土おこしをした。腰ぬけの私の姿にみかねた神父さまが3分の1位掘ってくださったので、大助かりだった。

今年も4月はじめに同じ場所を掘り、中頃に、油かす、化成肥料を、そのあとで堆肥を入れて畝づくりをする。5月に入って通りの青果店に苗を注文する。一束50本ベニアズマ。水につけてピンとさせるが、去年と比べて苗が細く弱よわしい。大丈夫かしら。お店番をした売れ残りかしら。70円も安く買えたけれど等と思いながら、8日、改良船底植えで苗を植える。

この日のレクリエーションの時に、シスター達に側を通ったら声をかけてくれるように頼む。シスター達は庭を散歩したとき寄ってくれて、“大きくなってネ。”と声をかけてくれる。私も毎朝行って気を送る。苗を植えて20日後、朝日新聞に“イモはなぜ種まきしない？”という記事があった。それによるとさつまいもは、熱帯やその近くでは花が咲くが、日本では珍しいので、種は手に入りにくい。それに、苗から育てたほうが沢山取れるということだった。さつまいもの花を見たことがないわけがわかった。

シスター達が目をむけていてくれたお陰で葉が一面に繁り、みごとだった。今年は日照りが続いたので水やりに気がついた。真夏に草取りを一回した。そこで一つ発見したことがある。よく耕された土の草取りは楽だということ。踏みに踏まれたところの草取りは大変なことを。9月下旬、梅檀の木の下30cm位掘ってみる。全然おいもがみえない。やっぱり今年はだめなのか。少々気が沈んでしまった。それから数日してシスター達にうながされて掘り始める。

すると紅色の頭が出てくる。出てくる。まわりの土を指でよけながら、1つ～とり出す。できた、すごい！ 再会したような気持ちになってうれし

さと喜びで掘り続ける。

出てくるおいものは泥だらけだけど、紅色がさえて輝いている。美しい！あるものは一杯機嫌のひとのよう、あるものは角隠しの花嫁さんの紅潮顔のよう、大きく太いのはお相撲さん、汗にまみれて奉仕や部活に励む青年達だったり、列車の中で出会ったお母さんに抱かれた赤ちゃんのようにかわいいのや、胎から出た赤ちゃんのようであったりで、1つ～さまざまな思いをしながら、楽しいも掘りをした。シスター達に収穫物を見せると「すごいねー。」「よく出来たわねー。」と言われて、私の顔はおいものようにホク～になる。一番大きいものは長さ30cm、約1K（泥つきで）。全部で30K余り出来た。そのうちのいくらかは、被害にもあって、カメ虫が穴から出てきたり、コガネムシの幼虫に傷つけられたものがあった。

大変だけれど土に触れていることはいい。心が落ち着くし、大地に立っている感じがする。それに、さつまいも掘りは楽しい。植えつけからちょうど5カ月目に収穫。

農夫は、秋の雨と春の雨が降るまで忍耐しながら、大地の尊い実りを待つ。

ヤコブ 5.7

一週間後、お礼肥えをすませた。ホク～のおいものをほおばりながら、来年はきゅうりにしようかな、絹さやにしようかな、夢はふくらむ。



繋がり



Sr 鈴木喜代

“朝顔が咲きました・・・”

この夏のある日、このような書き出しのほほえましい便りが写真と共に届きました。Sさんからでした。

私達共同体が、被拘禁者更生支援ネットワーク＝麦の会を通し、キリスト教の一員として、刑に服している人たちのために、祈り始めてから4年目を迎えました。この麦の会事務局には、数人のボランティアの方々が奉仕をなされていますが、Sさんはそのスタッフの一人なのです。

あじさいが咲く頃、4人の方々と共に来院され、私達共同体との出会いの場も与えられ、交流を深めました。帰り際に、一姉妹が朝顔の種を差し上げたのを早速蒔いたのでしょう。それが見事に咲いた嬉しさを、知らせてくれたのでした。

本当にささやかな事であるけれど、このことは麦の会事務局スタッフの希望である“被収容者のみなさまの人生が、少しでも明るくなるようにと力を尽くすこと”への一端であると、私は思うのです。

私達も、希望と励みが与えられたことに感謝しつつ、祈り続けてゆきたいと願うものです。



神のはからいは限りなく、生涯わたしはそのなかに生きる。

～～～感謝をこめて～～～

Sr 船田由美



真昼の太陽に焼かれ、緑の木陰でホッと、春のそよ風、小鳥のさえずりに慰められ、雨に打たれ、深まりゆく秋に心は沈められ、でこぼこ道でつまずき転び、水溜りで足をぬらし、キーンと張りつめた冷気に包まれた冬に孤独は深まり・・・修道女であるわたしの「心の四季」です。季節は移り変わります。でも、「神を慕い・・・神を賛美し・・・神と共に・・・神の中に生かされる・・・」この生活は変わりません。深まっていきます。

入会前、修道院から送っていただくユニオン・レターで、「3時の祈り」（本会の修道家族が毎日3時に唱える祈り）を知りました。次に記します。

イエスは酔を受けて、「成し遂げられた」と言い、おん頭を垂れて霊を渡された。

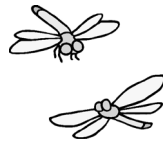
キリストは死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従う者となられた。

それゆえ神は、イエスを高く上げて、すべてにまさる名をお与えになった。

この祈りを唱えていくうちに、キリストの歩まれた道を生涯かけて私も歩みたいと強く望む気持ちが心に芽生えました。確かにわたしが望んだのですが、主が先に望まれてわたしにくださったのだと思います。終生誓願宣立の時もそうでした。わたしのタイトル「十字架につけられたイエスのスール・由美」も標語の「はい、父よ！」も先に主が望まれて「それを生きて欲しい」とわたしにくださったのだと信じています。

1983年12月3日に本会に召されてからの、ひとすじの道。誰の目にも隠されて、おん父のもとに帰っていく旅。母マリアは、娘を見守り祈ってくださいています。

初誓願宣立の1986年6月26日から25年目の今年、銀祝の恵みをいただきました。お祈りと愛でいつもわたしを支え励ましてくださっているお一人お一人に心から感謝申し上げます。「わたしは何もできていない。」これが正直な気持ちです。主が25年間の日々を祝福し、手をとって今日まで歩ませてくださっています。この地上で「成し遂げられた」とすべてをおん父にお返しするその日まで「神を慕い・・・神を賛美し・・・神と共に・・・神のなかに生かされる・・・」この歩みは続きます。心の四季もめぐりゆきます。
神様、ありがとうございます。



とんぼが一匹、笹の葉に。スーッと秋風が吹いてきて、
やらり やらり 笹の葉はやりかごになりました。
とんぼは ちょっとひと休み。
そして 静かに どこかへ飛んでいきました。

秋風が神様と遊んでる。
コスモスが神様と踊ってる。
みんな うれしそう！
わたしも幼子の心をいたでいて神様と遊びましょう。
喜びの輪に入れていただきましょう。

深い寂しさに襲われる時、
深い孤独に沈められる時、
自分ではそれを埋めることはできない。
でも、わたしは知っています。心の深いところに、あべてを癒し、
あべてを満たし、命を与え続けてくださっている御方がいつも共に
いてくださることを。
わたしは平和のうちに静かに待ちます。



»»»»»年の黙想 «««««

Sr 金井玉枝



10月14日から1週間カトリック内観による年の黙想をいただきました。修道院では5月から本館南側の敷地に増築工事が始まっており、騒音の響きと埃の舞う日々が続く中、工事現場から離れた客用宿泊所で泊まり、沈黙と潜心のうちに祈りを深めてゆくことができました。

今まで良い内観ができたことが無かったので、一日に7回の面接していただく計画を立てましたが、初日の面接で、今年の春から自分の生き方が変わってきたことを話すと、神父様は「もう内観に入っている」と言われ、日に4回と決め、一緒に生活しているシスターとの関係を、内観の視点、「していただいたこと、お返ししたこと、ご迷惑をおかけしたこと」の三点から心を見てゆきました。

毎日、祈りの報告と神父様のコメントをICレコーダーに録音して次の祈りに入るまでにそれを聞くうちに私の抱えている問題が少しずつ浮かび上がってきました。

今から15年前、個人黙想で目の見えない不自由さを受け入れる体験がありましたがそれはほんのスタート台に立っただけのことで、この戦いは死ぬときまで続くと言われてきました。

交流の困難さを感じる人の癖や欠点に振り回されている自分に先ず気づかされました。その人の問題は横に置いておき、そのことで振り回されている自分の心の反応をイエスの前に持っていくように照らしていただくように勧められました。

他者の問題と自分の問題をはっきり区別して処理できるよう精神的な自立を育ててゆけるように願いました。

私の問題は、先天盲が持つ、場の空気を読みとる困難があることかと思っていました。しかしそれは人間的レベルのことで、周りの人とうまく行かなくなったときは、どうしたら良いかという考えに従ってゆくよりも霊的感觉を磨きその判断で行く方が神との関係がしっかりとて安定性は保たれます。

霊的感觉とは謙遜のことで、これは聖ベネディクトの戒律の代7章に詳しく書かれている心の姿勢のことです。神の前に自分は無であることをいつの間にか忘れてしまう時、問題が出てくるのです。

私は人から判断が正しいと言われたり、自分は見えないことから直感力が働くのでほとんどのことは自分でわかっていると思ってきました。しかし他者が私のことをわかっていないことに思い至っていませんでした。他者とコミュニケーションするためには自分のことを伝えなければならないのに面倒臭がって、相手がわかってくれない時は鈍感だと他人のせいにしていたところが見えてきました。

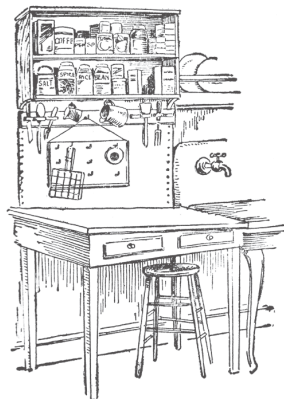
自分が受け止めることと他人が受け止めることには差があり、私が口に出して言わなければ相手は私がわかっていると思い誤解が生じ得るのです。それに気付かず未処理のままになっていた点が照らされました。



今回の内観でいただいた照らしは次のようです。

- ・ 見えないと言うハンディーではなくて見えないことから生じる心の闇が問題。
- ・ 相手の言っていることを確認するプロセスを持ち、一步一步確実に理解を深めてゆく。
- ・ 人とのいざこざの時、相手のことを横に置き、自分はどうかと言うことをイエスの元に持ってゆき照らしを求める。

終わりの頃には、イエスの前で具体的に話すようになっていました。同行して下さった神父様と黙想の間働き、祈って下さった姉妹たちに感謝し祝福を祈りました。



巡 礼

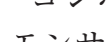


Sr. 関雅枝（在フランス）

現在日本の教会で聖地巡礼と言えば、長崎の殉教者記念教会に詣でるにしても、ルルドへの巡礼と言っても、目的地の近くまで飛行機あるいは汽車を使い、そのあとバスやタクシーで目的地に到達するのが大方であろう。たまに隠れキリシタンの地を探索あるいは単に散策する人もいるようだが、あまり一般的ではなさそうである。もちろん日本語にも行脚とか遍路と言う語が存在しているのだから、巡礼という言葉に歩くと言う意味が含まれているにはちがいないが、21世紀に生きる私たちはあまりにも便利なことに慣れてしまったのかもしれない。

それはともかくとして、キリスト者であれば誰でも生涯一度はキリストの生きたエルサレムやキリスト教の総本山であるローマに行ってみたいと思うだろう。いわゆる聖地巡礼と言うわけである。ここフランスには、聖地と言われる場所が多数あるが、それでもヨーロッパのキリスト者は、上記のエルサレム、ローマに加えて、スペインのコンポステルをあげ三大聖地としている。しかも目的の聖地まで祈りながら歩いて行くか、せめて自転車など体を使っての乗り物で行く巡礼者も多い。充分体力のない人や、勤めがあって長い休暇が取れない人などは、一回で目的地に貫通できなくとも何年かに分けて今年は三分の一、来年は次の三分の一と、遊び半分ではなく巡礼の本来の意味を生きている。





コンポステルだけでなく、ここは有名なモンサンミッシェルのすぐ近くでもあるので、モンサンミッシェルへの巡礼者も修道院を利用する。今年の大聖ヤコブの祝日（7月25日）には、アンジェと言う町からこのンジャック修道院を目指して、一日40キロメ

更に8月も終わり頃のある日、ブルターニュ地方からエルサレムへの巡礼を志した司祭が立ち寄り、やはり私たちと祈りをともにした。6ヶ月かけてエルサレムまで歩いて行くのだそうだ。リュックは最高10キロどまりの重さにしてテクテクと... なるほど日本と違い陸続きだから歩いて行かれるわけだが、それにしても私にとって気の遠くなるような

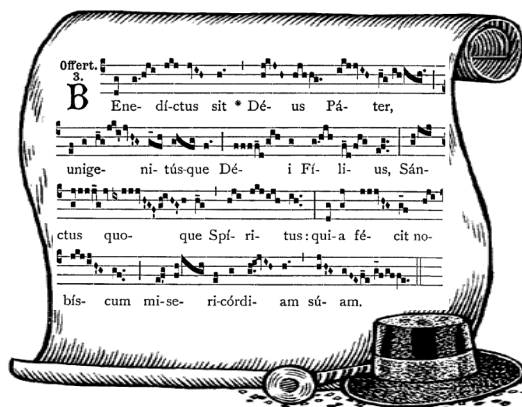
話だ。彼も自分に用意されている神のみ心を捜しての行脚である。



二人の司祭の例をあげたが、司祭だけでなく子育ての終わった壮年夫妻が信仰を深めたいとベルギーからの自転車巡礼、若い青年たちの未来探求といろいろある。こうして私たちは巡礼者をもてなすことにより巡礼者からいろいろな恵みを受ける。同時に巡礼者にとっても私たちの存在はただ宿を貸すと言うだけでなく、何かそれ以上の明かしになっていると良く言われる。女性の巡礼者には私たちの食卓を提供してともに夕食をとるのだが、私たちの食堂での光景は彼女たちにとって驚き以外の何者でもなく、あとからそんなインパクトを伝えられる。こうして見ず知らずの兄弟姉妹とのキリスト的出会いを戴いている。

これらの巡礼者が異口同音に打ち明けられることは、疲れやときには痛みなどとともに黙々と孤独、潜心の内に歩き続けることによって、不思議な体験を一杯するようだ。不思議なと言うのは何も常軌を逸した神がかりのことではなく、迷っていたことに関する確信を得るとか、祈りにおける深まり、神と兄弟に対する愛等々である。もちろん文字通りの不思議、探し物が見つかったなどと言う話も聞いたが。

聖ベネディクトの精神に則り、自ら外に出て行かず、客をキリストのごとくもてなすよう求められている私たちが、囲いの中で出来る小さな奉仕の分ち合いまで。



2011 年東日本大震災

F. エンマヌエル 野口義高
(トラピスト)



今年 2011 年も終わりまであと数ヶ月にさしかかったが、3 月 11 日の地震、そして東北地方を襲った大津波、さらには原発の事故によって、いまだに日本全体が頭にガンと強い一撃を受けて脳震盪を起こした後遺症の只中にあるようだ。

3 月 11 日の直後からネットでは災害の有様を伝えるプロ、一般の動画や写真があふれた。津波が防波堤を越えて人家に迫り、あっという間に家が流される様子を高台から撮影したビデオや、地震後の崩壊した町の有様などだ。その中で 1 枚の写真が目に飛び込んできた。その写真には次のような説明書きが付されていた。「今年 3 月 11 日に大地震と津波が日本を飲み込んだ直後、1 枚の写真が世界の人々の胸を締め付けた。ある若い女性が、がれきの山となった村で、地震で寸断されたアスファルト道路の端に座り込んで泣いている写真だった。横に赤い長靴を並べ、裸足のまま座っていた姿が印象的だった。しかし、当時その写真を撮影した AP 通信の写真記者も、女性があまりにも悲しそうに泣いていたため、名前すら聞けなかったという。」

背景は瓦礫と化した人家。まともに姿をとどめている建物などない。家具などの瓦礫の山を前にこの女性は裸足でただ泣き続けていたのだった。家を失い、家族やペットも失ったのだろうか。それだけではないだろう、友人も親友も仕事も、そして将来の夢や希望さえも一瞬にして奪われてしまったのかもしれない。朝出かけるときには、いつものように 元気に玄関を出かけていったことだろう。しかし、その数時間後、彼女は跡形もとどめていない自宅前の道路に一人座り込んでいる。

この女性について、その後の報道はない。どうなったのだろうか、知ることはできない。この写真を見たすべての人が心を痛めたことだろう。共に涙

したことだろう。大震災で家族を失った方々、被災者の方々に皆、同じような悲劇が起こったのだ。それは、いつどこでも起こってもおかしくはない未曾有の災害だった。しかし、だからと言って今回の被災者の方々が貧乏くじを引いたのではない。自分たちは無事だったから、ああ、よかった、と胸をなでおろすなら、何と身勝手なことだろう。

人はこのような異常事態にあっても、それに身体が慣れてくると適応能力というのか、不思議に当たり前のように思えてくる。熱くては入れない風呂にもじっとしていると、なぜかしら慣れてくるのだ。でも熱さはなくなったわけではない。3月11日から一日一日と時間が過ぎ、ひと月またひと月と重ねていく内に、私たちは現状に慣れっこになってしまう。そしてあの記憶は時間の中に輪郭を薄くして行く。共感もいつの間にかぼやけて行くのだ。震災関係の報道はますます少なくなり、災害ボランティアの活動や被災者の生活について日常の中で語られることもなくなる。マスコミは次のビックニュースを必要としているかのようだ。世界情勢や世界経済はそんなことにかまってはられない、と言わんばかりだ。報道されるのは「風評被害」という名の情報だ。日を追う毎に、人々の心の中は自分の体験する不便だけを恐れ、被災者の方々の生活を忘れかけているのではないだろうか。私たちは被災者だけが置き去りにされてしまわないことを切に祈り求める。



しかし、私は思う。この大災害を通して神は私たちに何を示しておられるか、と。不幸にしてお亡くなりになられた方を、私たちは生き返らせることはできない。この世を去られた魂は神様にお任せするしかないのだ。それならば、今生きている私たちがなすべきことは、果てしない悲しみと憤りの闇の内にいつまでも座することではなく、その悲しみから立ち上がり前進の一步を踏み出すことだろう。だがそれは大地震と津波の原因を追及するという意味ではない。もちろん、そのような研究が貴重で将来に寄与するであろうことは憶測できる。そして、大災害の原因を探っても探求しても、地震プレートの移動や地殻変動、環境破壊、地球温暖化とかさまざまな科学研究がなされるのであろう。だが、私たちに求められているのはそういうことではないように思われる。つまり、私たちは神に問うのだ、あな



たはこの大災害を通して私たちに何を語っておられるのでしょうか。何を学べとおっしゃっておられるのですか、と。

その時、私は心の内にふと、一つのキーワードが浮かび上がってきた。「自然と私たち人間との関わり合い」だ。地震も津波もそれ自体は自然災害だ。天からの恵みと地からの両方の恵みを受けてこの地上の命あるものは生かされている。人間もその内に含まれるはずだ。動植物は自然のサイクルの中に、自然と共に調和して生きる。最近は環境保護やエコロジーという言葉が普通に響き合う。環境についてだけではない。動植物はお互いが自然の中で一つの統一体として、お互いが生かしあっているのではないだろうか。では人間はどうなのだろうか。互いが互いを本当に生かし合い、自然を尊び、神を敬う。そんな当然なことがおろそかにされていたのではないか。

私たち人間の魂の奥底にはやはりエデンの園の記憶が深く刻まれているかのようなのだ。神と人とが調和を保った自然の中で共にあった日々。今こそ、その元初の生き方に戻れ、と言われているような気がしてならない。神が創造された大地の恵みをいただきながら、人と自然とが調和の内に共生していく生活スタイルが不可欠なのだ。修道院とは元来、そのような生き方を実践している場である。将来あちこちで生まれるであろう、自然と共に生きる小規模生活共同体をすでに聖ベネディクトは先取りしていようだ。



📖 後書き

激動し続けた一年も終わりに近づきました。恩人・親族・友人の皆様方にはいかがお過ごしでしょうか。今年も、修道院便りを皆様のお手元へお届けできることを心より嬉しく思っております。

来る年がお一人お一人にとって幸豊かな年となりますよう、お祈り申し上げます。

(Sr. Marie Laetitia 萩野恭子)



2011 年における主な行事

※ 毎月、前島誠先生による聖書講義がありました。(工事のため8-12月は休講)

※ 毎月、藤岡氏による楽器レッスンがありました。

- ❖ 1月2日～6日 MOPP（ペトロ・パウロ労働宣教会）の兄弟たちの滞在。
- ❖ 1月20日 茂原聖公会高田司祭のお話し。
- ❖ 3月11日 東日本大震災、Br.高橋来院、16日宮城県へ出発。
- ❖ 3月11～18日と22日～31日 藤原師の指導による内観黙想
- ❖ 4月26日 Sr.荻野恭子、誓願50周年金祝
- ❖ 5月12日 森川靄子先生による朗読の研修会
- ❖ 5月15日 茂原教会との親睦会
- ❖ 5月25日 増築工事のための定礎式
- ❖ 6月10日～12日 Br.ジュリアノによる講義
- ❖ 6月23日～8月23日 Sr.赤井幸子、フランスへ。
- ❖ 7月1日 廣松千鶴子さん志願期開始
- ❖ 9月1日～30日 Sr.岡島静代とSr.樋口碩子、会議のためにフランスへ。
- ❖ 9月23日～24日 ひなげしの会黙想会
- ❖ 10月14日～21日 藤原師の指導による3人の姉妹の内観黙想
- ❖ 10月21日 千葉寺教会、東金教会合同巡礼
- ❖ 10月22日 テゼーの祈りの集い。
- ❖ 10月25日～27日 ベネディクトフォーラムにSr.岡島出席
- ❖ 10月29日 韓人教会（東京関口教会）巡礼
- ❖ 10月30日 白子町全域の津波避難訓練に参加
- ❖ 11月1日 Sr.佐々木あとし、初誓願宣立
- ❖ 11月12日 Sr.船田由美、誓願二十五周年銀祝
- ❖ 12月6日 修道院の増築棟の祝福式

※ 修道院の活動

- ❖ 聖書の勉強会 毎月2回 Sr.赤井担当
- ❖ グループ・レクシオ 毎月1回 Sr.服部担当

十字架のイエス・ベネディクト修道会

平和の元后修道院

千葉県長生郡白子町八斗 1805

郵便番号 299-4213

電話 0475-33-3829

FAX 0475-33-7067

ホームページ <http://www.benedictinesjc.jp>